

秩父の天然氷作り

大久根 茂

はじめに

令和3年4月29日から6月20日まで、当館ではテーマ展「天然氷」を開催した。現在、埼玉県内での天然氷作りは1か所だけだが（全国でも7か所にすぎない）、開催に向けて調査を進めたところ、かつては秩父地方をはじめ各所で行われ、県央の平野部にも氷池（製氷池）があったことがわかった。本稿では、その中から対象を秩父地方に絞り、文書資料

や古老の記憶などから、天然氷作りの場所・営業者・営業年代・氷池の数などについて、確認できたことを報告しておきたい。

なお、典拠として示した「県行政文書」は埼玉県立文書館所蔵資料、「菊池建太著」は『天然氷の歴史と今－究極のエコロジー産業をおって－』（2006年）を表し、掲載した地図は国土地理院のweb地図を利用したことをお断りしておく。

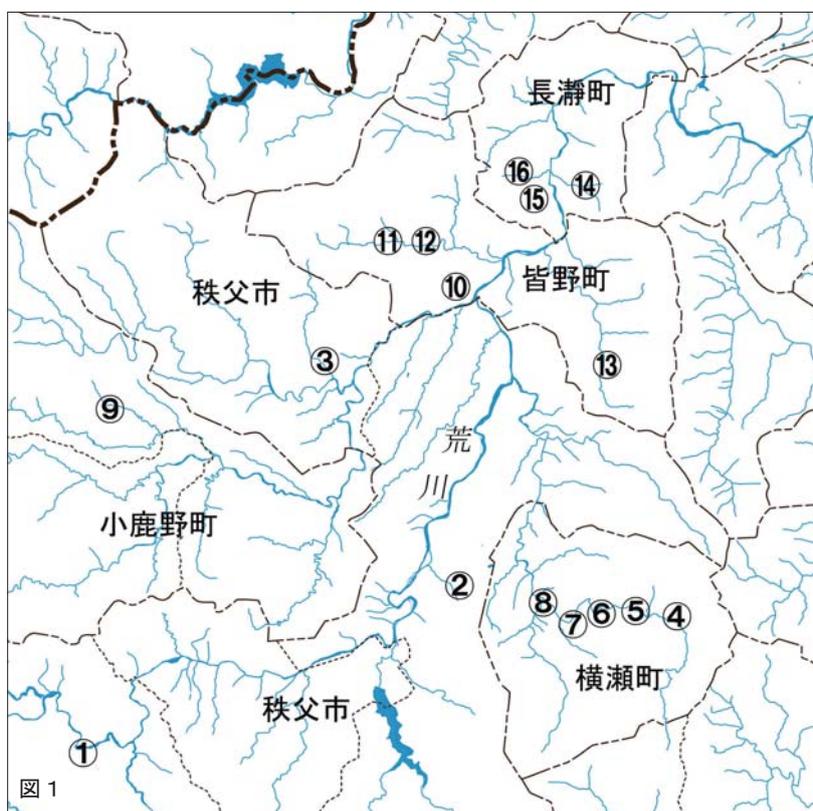


表 1

No.	場 所	河川名	No.	場 所	河川名
①	秩父市大滝字大輪	車沢	⑨	小鹿野町飯田字岩殿沢	岩殿沢
②	秩父市下影森字滝ノ入	押堀川	⑩	皆野町野巻字高橋沢他	高橋沢
③	秩父市吉田阿熊字彦久保	阿熊川	⑪	皆野町下日野沢字若浜・中平	日野沢川
④	横瀬町芦ヶ久保字赤谷	横瀬川	⑫	皆野町下日野沢字日野	日野沢川
⑤	横瀬町芦ヶ久保字大畑	横瀬川	⑬	皆野町三沢字広町	三沢川
⑥	横瀬町芦ヶ久保字川地	横瀬川	⑭	長瀬町風布字蕪木	鶴沢
⑦	横瀬町横瀬 滝の枕	横瀬川	⑮	長瀬町長瀬	櫛沢
⑧	横瀬町横瀬字寺久保	横瀬川	⑯	長瀬町本野上	高野沢

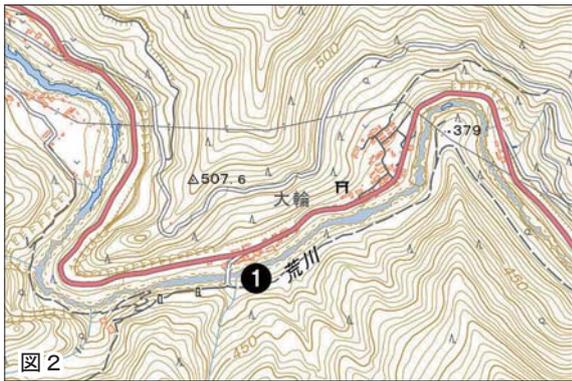
①秩父市大滝字大輪 車沢

- ・ 営業者：地元組合（代表：高野いせ）
- ・ 営業年代：昭和10年頃までか
- ・ 氷池数：1
- ・ 典拠：埼玉製氷同業組合員名簿（昭和5年）、千島茂氏談

三峯神社表参道の登竜橋より50mほど下流の荒川右岸。荒川に流れ込む車沢の水を引き入れて製氷していた。河川敷の岩盤上にコンクリートと石積みで作られた氷池の一部が残り、山寄りにはコンクリート製の氷倉の壁体も残っている（写真1）。三峯神社の所有地なので、三峯神社との関連も考えられるが、神社に問い合わせたところ関係は不明とのことであった。代表者の高野いせは当時大輪に住んでいたがその後飯能市に転居したという。



写真1 コンクリート製の氷倉



②秩父市下影森字滝ノ入 押堀川（おっぼりがわ）

- ・ 営業者：武州製氷株式会社（秩父市）
- ・ 営業年代：大正時代
- ・ 氷池数：1
- ・ 典拠：加藤喜男・新井克彦両氏談

押堀川沿いの集落が途切れた上流部、川から離れた左岸の平場にコンクリート製の氷池



があり、水は押堀川から引いた。営業者には秩父市の横川商店も加わり、大正時代の一時期だけの営業で、その後横瀬川に移った。廃止後、氷池の水を凍らせて子供たちがスケートをした時期もあった。その後、土盛りして氷池を隠し、滝ノ入公園として現在に至る。

③秩父市吉田阿熊字彦久保 阿熊川（あぐまがわ）

- ・ 営業者名：斎藤留吉のちに秩父市下吉田の竹内家（竹内春吉→松吉→豊太郎）
- ・ 営業年代：昭和10年頃まで 菊池建太著では1890年頃～1940年頃
- ・ 氷池数：1
- ・ 典拠：県行政文書（明治25年）、埼玉製氷同業組合員名簿（昭和5年）、『吉田町史』、菊池建太著、竹内剛久氏談

竹内家は棕神社の西側にあり、今でも「氷屋」と呼ばれている。氷池は子ノ神の滝から300mほど上流の河原にあり、採った氷は自宅の氷倉（現存）まで背負って運んだ。夏まで保存した氷は、荷車で小鹿野の町に出荷したという。なお『吉田町史』には、明治33年（1900）に斎藤留吉が始め、翌34年に竹内春吉が引き



写真2 竹内家で使用した氷鋸と氷鉞



継ぎ、昭和10年頃まで行われていたとあるが、県行政文書では明治25年（1892）に竹内春吉の名前で氷池の設置願が出されている。

④横瀬町芦ヶ久保字赤谷（あかや）横瀬川

- ・ 営業者名：町田恒吉（芦ヶ久保字大畑）
- ・ 営業年代：大正初期（大畑に移るまでの数年間）
- ・ 氷池数：不詳
- ・ 典拠：町田勝一氏談

赤谷集落の南側、横瀬川に架かる橋の上流部。横瀬川の河原に氷池を作った。町田勝一氏によれば、氷池を下流の大畑に移すまでの数年間やっただけとのことで、詳細は不明。

⑤横瀬町芦ヶ久保字大畑（おおばたけ）横瀬川

- ・ 営業者名：町田家（町田恒吉→又市）
- ・ 営業年代：大正10年頃から昭和25年頃まで
- ・ 氷池数：5
- ・ 典拠：町田家所蔵資料、町田勝一氏談

町田勝一氏宅（横瀬町芦ヶ久保786）の正面の河原に氷池があった。登録上の場所は氷池は横瀬川左岸の「崩之沢（くえのさわ）」、氷倉は右岸の「花ノ木平」となっている。同

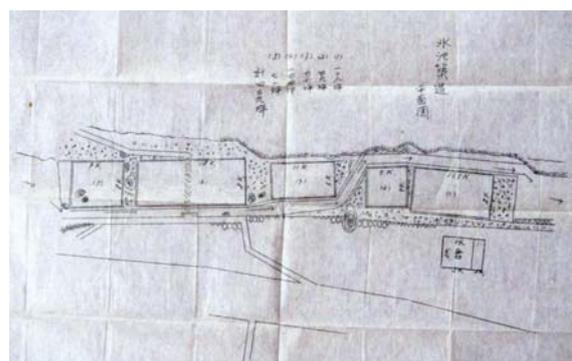


写真3 氷池築造平面図

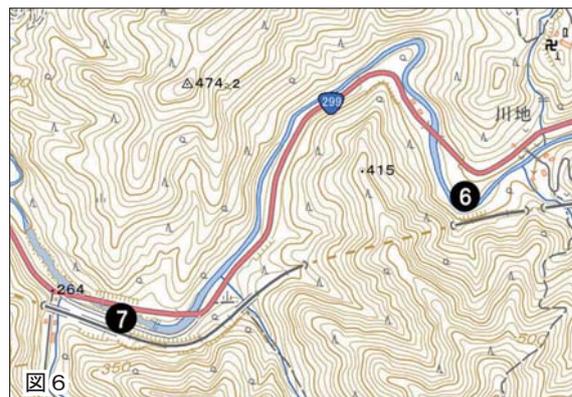


写真4 木造の氷倉

家では「冰雪請売営業届（昭和8年）」「飲用水検査済証（昭和15年）」「氷池築造平面図（年代不詳）」と氷倉（伊勢湾台風で倒壊）の古写真（写真4）を所蔵。氷池築造平面図（写真3）によれば、ほとんど川幅いっぱいには大小5つの氷池が作られている。

⑥横瀬町芦ヶ久保字川地（かわじ）横瀬川

- ・ 営業者名：町田家（横瀬町芦ヶ久保）と横川商店（秩父市番場町）の共同経営。石灰岩採掘の秩父産業も加わっていたかもしれない。
- ・ 営業年代：昭和になってから（大畑と同時期に営業）



- ・氷池数：不詳
- ・典拠：町田勝一氏談

道の駅「あしがくぼ」の下流、かつて「あしがくぼスケートリンク」(1976～1998)があった場所で、現在は武甲運輸(株)が所在。氷倉もこの場所にあったが、氷池の詳細は不明。

⑦横瀬町横瀬 横瀬川 滝の枕

- ・営業者名：横川商店(横川新一、秩父市番場町)
- ・営業年代：天然氷作りは昭和36年までで、その後は機械製氷となる。
- ・氷池数：6
- ・典拠：菊池建太著、加藤喜男著『天然氷採氷の記録 滝枕随想』(2007年)、加藤喜男氏談

滝の枕と呼ばれる小滝の上流、現在右岸側が昭和通運(株)のトラックターミナルになっている。当時の国道299号は左岸側を走っていた。氷池作りは毎年11月3日に始め、11月

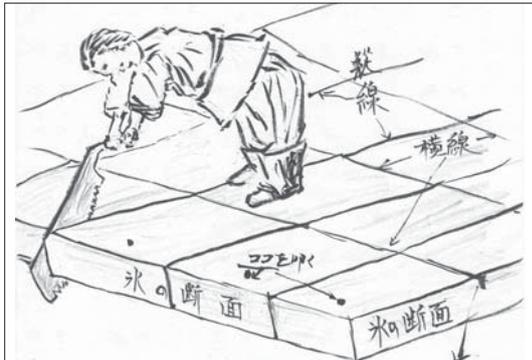
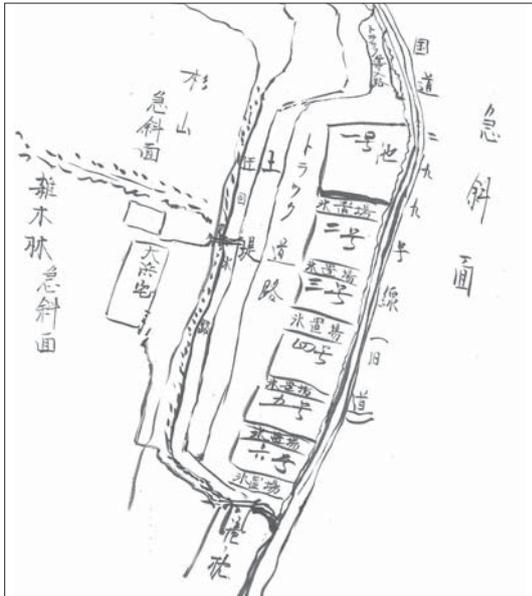


写真5 氷池の平面図と氷切り(加藤喜男氏画)



写真6 製氷風景(昭和36年、堀口英昭氏撮影)

末までに作り終えた。2月になると気温が上がるので、カンテラの照明で夜間に作業。氷切りは若者の仕事。昭和30年頃から電動鋸が導入された。氷はトラックで秩父神社裏手の氷倉に輸送して保存。氷池はシーズンが終わると崩して元の河原に戻した。昭和36年に堀口英昭氏が撮影した写真と、採氷の経験者加藤喜男氏が描いたイラストが残っている。

⑧横瀬町横瀬字寺久保 横瀬川

- ・営業者名：横川商店(横川新一、秩父市番場町)
- ・営業年代：昭和初期(第2次世界大戦頃までか)
- ・氷池数：4～5
- ・典拠：埼玉製氷同業組合員名簿(昭和5年)、菊池建太著、加藤喜男氏談

豆腐屋だった横川商店(秩父神社の隣にあった)が、大豆の仕入れで北海道に行き、先方で製氷場を見てこれなら秩父でもできると「武州製氷株式会社」を創業。氷池を作ったのは横瀬川の右岸、横瀬橋と武光橋の間で、現在この場所は「ぶこうの里デイサービスセンター」をはじめ宅地化されている。



写真7 昭和初期の製氷風景



川の左岸（南側）が高い崖になっているため、右岸側に日陰が広がる。戦時中も営業していたが、氷が張りにくくなったため、その後上流の「滝の枕」に移った。製氷風景を記録した古写真があり、輸送用の馬車とトラックが見える（小川町の個人から当館に寄贈）。

⑨小鹿野町飯田字岩殿沢 岩殿沢

- ・ 営業者名：大和館（石橋氏、小鹿野町小鹿野）
- ・ 営業年代：昭和30年頃まで 菊池建太著では1931年頃～1977年
- ・ 氷池数：2
- ・ 典拠：菊池建太著、斉藤富恵・猪野保司・強矢ヨネ子各氏談

札所31番観音院の手前約1km、小鹿野町日尾への分岐点のあたりに氷池があった。岩殿沢の左岸（北側）に石垣と俵（のちに石垣とコンクリート）で氷池を2つ作り、岩殿沢の水を引いた。氷池の北側（沢の反対側）には細い車道があり、切り出した氷を小型トラックで大和館まで運んだ。大和館（小鹿野町の十輪寺のそば）まで遠いため、そばに管理人の小屋があり、管理人が毎朝池の周囲の氷を割り、網ですくって捨てていた。廃止してからも、夏には水を張って子供たちが水遊びに



使っていたという。

⑩皆野町野巻字高橋沢 高橋沢

- ・ 営業者名：逸見家（四郎次→政次郎）
- ・ 営業年代：昭和16、17年頃まで
- ・ 氷池数：5（のちに2）
- ・ 典拠：県行政文書（大正5年）、逸見宮吉著『古希印記1』、菊池建太著、宮原まつえ・逸見勝・宮前昭各氏談

高橋沢は赤平川の支流。赤平川との合流点近くの1号池から上流に向かって5号池まであったが、県行政文書では大正4年に1号池（高橋沢）・2号池（赤岩）・4号池（矢所）の「返還届」が出され、3号池（一ノ瀬）と5号池（日陰松）は「継続願」が出されている。このうち2号池・3号池・5号池は県行政文書の付図と聞き取りで場所が確定できたが、1号池と4号池の場所は確認できなかった。「継続願」によれば、氷池の大きさは3号池が長さ12間、幅1間半、5号池が長さ10間、幅1間半。いずれも高橋沢の左岸で、その構造は次のようなものであった。

右製水池ハ、民有地地先ニ其一方ヲ接セシメ、水流ノ一部ヲ各号坪数ニ仕切り、周囲ハ高壱尺五寸、巾式尺位ニ石垣ヲ取り候入水路ヲ設ケ、排水ニ便ナラシムル構造ニシテ、増水ノ際ト雖モ水ノ湛エルコトナク、従ッテ近傍土地ニハ毫モ障害ナキ様築造スルモノナリ（県行政文書）

製氷業を始めた逸見四郎次は、製氷作業中に卒倒して大正4年1月に死去。次男の政次郎が5ヶ所のうち2ヶ所での製氷を引き継いだようである。氷の切り出しには野巻地区の数人が雇われ、氷池から自宅の氷倉までは、近所の人たちが小遣い稼ぎにショイタに2枚ず



つ（子供は1枚）、斜めに縛り付けて運んだ。最奥の5号池から氷倉までは約1kmの距離がある。高橋沢下流右岸にあった逸見家は、屋号「氷屋」と呼ばれ、自転車にリヤカーをつけて皆野や吉田の商店まで氷を卸しに行ったという。

⑪皆野町下日野沢字若浜・中平 日野沢川

- ・ 営業者名：阿左美家（阿左美源治→鶴吉）
- ・ 営業年代：明治23年から昭和18年頃まで
- ・ 氷池数：不詳
- ・ 典拠：県行政文書（大正元年）、菊池建太著、式守俊信・阿左美守正・阿左美敏子各氏談

日野沢川は荒川の支流。河道が東西方向で、南側に山があるので、川は終日、日陰になっている。氷池は字若浜の善福寺の下流200mのあたりに3か所と、ずっと下って金沢川との合流点よりやや上流、字中平の「お玉淵」付近に1か所（氷池は2つ）作られていた。後者は川と道路との高低差がかなりあり、氷を運び上げるのが大変なので、のちには若浜のみでの製氷となった。

氷池は石垣を積んで作ったものとコンクリート製のものがあつたが、昭和24年の台風による増水で壊されてしまったものが多いという。最上流の氷池では、日野沢川の右岸に流れ込んでいる桧沢の水を引き入れたが、それ以外は日野沢川の水を利用していた。大正元年の申請書には、次のような説明が付され、石垣で作ったころは毎年春には元の河原の状態に戻すとある。

氷池設置方法ハ、周囲ハ玉石ヲ以テ積立、深サ貳尺内廻リ厚サ壹寸ノ板ヲ張り付、池底ハ清潔ナル砂利ニテ水道ハ砂濾ヲ造リ、下方ニハ壹寸板ニテ七寸口ノ排水口ヲ設ク、

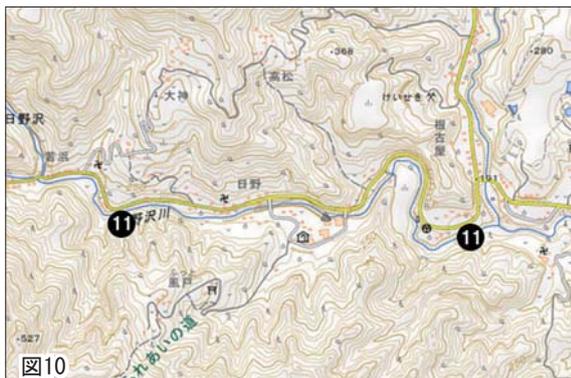


図10

毎年三月河原地返地ノ節ハ、取方付原形ニ復シ水害ナキ様構造ス（県行政文書）

製氷業は明治23年に阿左美源治が創め、息子の鶴吉のときにやめる。屋号は「氷屋」と呼ばれ、自宅前とお玉淵に近い車道脇に氷倉があつた。また、鶴吉は長瀬町の檜沢にあつた氷池を村田家から買い取り、作った氷は鶴吉の次男松五郎が皆野町金崎に分家して「阿左美氷店」を開業したので、そこに氷を納めるようにした。これが現在の阿左美冷蔵の前身である。

⑫皆野町下日野沢字日野 日野沢川

- ・ 営業者名：阿左美清吉
- ・ 営業年代：不詳
- ・ 氷池数：2
- ・ 典拠：県行政文書（大正元年）、式守俊信・阿左美敏子各氏談

創業年代は明らかでないが、後北条氏の家臣だつた阿左美伊賀守の屋敷跡（皆野町指定史跡）に住まいのあつた阿左美本家（阿左美久吾）で氷を扱っており、分家の阿左美清吉がそれを引き継いだのではないかという。氷池の場所は、字日野の明德寺の付近2か所、日野沢川右岸にあり、申請図面では1号池・2号池とも長方形で、面積はいずれも48坪となっている。また、氷倉の大きさは3間2尺×2間3尺となっている。2号池のすぐ下流にはかつて旧道（札所34番水潜寺への参詣道）にかかる橋があつたが、現在橋はなく、道跡は不明瞭になっている。

申請書には氷池の構造が次のように記されている。

氷池設置方法ハ、付近ノ玉石ヲ寄せ、周囲ニ高サ二尺ノ垣ヲ造リ、夫レニ椗ノ尺板ヲ



図11

張廻シ、池底ニハ清潔ナル敷砂ヲナシ、引水口ニ濾ヲ造り下方ニ吐水口ヲ造り、夏期増水ノ際ハ押破ルル仕組ニテ、水上水下共水害ナキ様構造ス（県行政文書）

⑬皆野町三沢字広町 三沢川

- ・営業者名：山口安五郎
- ・営業年代：不詳
- ・氷池数：1
- ・典拠：県行政文書（明治25年）、関根俊彦氏談

荒川の支流・三沢川の上流部にも氷池があったことが、県の行政文書から明らかになった。氷池があった広町地区は、かつて絹織物が盛んで、いくつもの織物工場があった土地である。江戸時代には、江戸・川越方面から粥新田峠を越えて秩父に入る街道と、熊谷・寄居方面から釜伏峠を越えて秩父に入る街道がここを通過していたので、秩父札所や三峯神社を目指す旅人や商人でにぎわいを見せていた。

申請書の添付図面によれば、氷池の場所は、粥新田峠道が三沢川にかかる橋の上流およそ100mの、川の中央部となっている。しかし、現地を見る限りでは、谷が浅く、南北方向の流れで日陰がほとんどない場所なので、製氷には不向きのように見える。当時は川沿いに日を守る林があったのかもしれない。

営業者（申請者）の山口安五郎は、明治28年から30年まで三沢村の村長を務めた方で、住まいは広町の集落を見下ろすなだらかな斜面にあった。

ただ、この近くにお住まいの大正15年生まれの方でさえ氷池の記憶はないとのことで、それ以上のことは明らかにできなかった。



⑭長瀬町風布字蕪木 鶴沢

- ・営業者名：蕪木・大鉢形・阿弥陀ヶ谷の3耕地
- ・営業年代：大正12年から昭和3年頃まで
- ・氷池数：1
- ・典拠：大野英雄氏手記、大野英雄・村田嘉行各氏談

鶴沢は荒川の小支流。蕪木の集落から流れ落ちる蕪木沢（涸れ沢に近い）が合流する鶴沢の左岸に、町指定天然記念物の「横臥褶曲（菊水岩）」があることで知られている。氷池はその菊水岩のすぐ下流にあった。鶴沢の右岸に石垣を組んで嵩上げたところにコンクリート製の氷池を作り、少し上流から鶴沢の水を引いた。この石垣とコンクリートの残骸を、今でも岸辺に見ることができる。

このあたりでは山間の集落を耕地といい、氷池は蕪木・大鉢形・阿弥陀ヶ谷の3耕地が共同で管理し、交代で当番を置いた。蕪木の蕪木大野英雄氏が書きとどめた手記には次のよう

にある。
製氷にあたっては池の周りの氷を割って、中の氷をうかせて氷を厚くする作業も当番であった。（中略）氷倉は、氷池の上流蕪木沢の反対側にあった。麦わら葺きの2階建てで、1階が貯蔵庫、2階は集会所として使った。1、2月に製氷し、竹で流し台を作り、道まで滑らして運び、これを荷車で貯蔵庫まで運搬した。貯蔵方法は大鋸屑の中で保管した。夏場、高歯（農車）で野上の高砂屋や長瀬方面にも運んで販売した。（中略）このように地区民一丸となって事業にあたったが成績は良くなく、5、6年で中止せざるを得なかった。



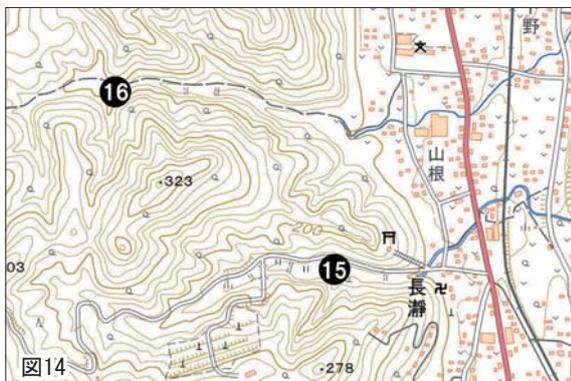
⑮長瀬町長瀬 檜沢（ならさわ）

- ・ 営業者名：村田家（長瀬町）→阿左美家（皆野町）
- ・ 営業年代：大正初期から昭和45年まで
- ・ 氷池数：4（5?）
- ・ 典拠：長瀬町郷土資料館展示解説パンフレット、菊池建太著、村田嘉行・阿左美哲男各氏談

檜沢は、宝登山の北側を西から東に流れて荒川に注ぐ小支流である。合流点より500mほど上流、白山（しらやま）神社のそばに4つとも5つとも言われる氷池があり、本山根池（もとやまねいけ）と呼ばれていた。現在は砂防堰堤を境に上流は河床が埋まり、下流は護岸工事によってかつての面影は残っていない。

創業者は、村田緋（野上緋）の創始者として知られる村田源三郎（1868～1943）である。織物工場が檜沢の近くにあったためか、大正初期に檜沢で製氷を手掛け、切り出した氷は工場敷地内の氷倉に保存した。

しかし、のちに村田家は製氷業から手を引き、そのあとを引き継いだのが皆野町下日野沢で製氷業をしていた阿左美鶴吉であった。その後、鶴吉の次男松五郎が分家して皆野町金崎で「阿左美氷店」（のちの阿左美冷蔵）を開き、檜沢と高野沢の2か所で製氷を行ったが、昭和45年に檜沢での製氷は終わりを告げた。



⑯長瀬町本野上 高野沢（たかのさわ）

- ・ 営業者名：阿左美家（阿左美松五郎→吉雄→哲男→幸成・亮二）
- ・ 営業年代：昭和7年から現在
- ・ 氷池数：3→2

- ・ 典拠：菊池建太著、阿左美哲男氏談ほか

高野沢は檜沢の北側を檜沢と並行して流れ、荒川に注いでいる小沢である。氷池は長瀬町立長瀬第一小学校から西に800mほど入った谷あいであり、大久保池と呼んでいる。檜沢の氷池の場所に比べると、かなり奥深い感じを受ける。皆野町下日野沢の阿左美家（阿左美鶴吉）が、水田だった場所を買い取り、製氷場としたものという。

氷池は高野沢の左岸にコンクリートで作り、高野沢の水を引いている。当初は沢沿いに3面あったが、下流の1面は使用をやめ、現在2面での製氷を続けている。埼玉県内では令和3年現在唯一の天然氷作りであり、全国でも7軒しか行っていないうちの1軒となっている。氷倉（現在は電気冷凍庫）は金崎の本店内にあり、切り出した氷は小型トラックで何度も往復して運搬している。毎年10月中旬に行う氷池周辺の草刈りから準備にかかり、1月から2月にかけて2回の切り出しが行われてきたが、近年は温暖化の影響か1回しかできないことも多いという。



写真8 現在の製氷風景

謝 辞

本報告にあたり、下記の方々に多大なご協力をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

埼玉県立文書館、阿左美冷蔵、阿左美敏子、阿左美守正、新井克彦、猪野保司、大野英雄、笠間洋右、加藤喜男、菊池建太、小石川邦二、斉藤富恵、式守俊信、強矢ヨネ子、関根俊彦、竹内剛久、千島 茂、朽原嗣雄、逸見 勝、堀口英昭、町田勝一、宮原まつえ、宮前 昭、村田嘉行（敬称略）